

『私の知らないワタシの願い』 作…岩本憲嗣

■登場人物

中谷知美（なかたにともみ／38歳／女／OL）

中谷結衣（なかにゆい／16歳／女／知美の娘）

茅野修二（かやのしゅうじ／40歳／男／自称警察官）

部長

医者

○病院・診察室

医者 「……異常なしですね。ああいった事故の後ですから、恐らくは精神的な要因かと」

知美 「そうですか……」

椅子から立ち上がるとドアを開けて出ていく知美

○病院・待合室

待合室の騒音。テレビの音も漏れ聞こえる。結衣が知美の元に駆けてくる。

結衣 「どうだって？お母さん？」

知美 「え？うん、何ともないって」

結衣 「良かったあ。あたし本当に心配してたんだから。あくあ、なんか安心したらお腹空いちやった。ねえ、ファミレス行こうよ」

知美 「そうね」

結衣 「その後は買い物だよ。初デートに着てく服一緒に選んでくれる約束だもんね」

結衣M「私の腕にしがみつき愛くるしい笑顔をこちらに向けてくる彼女。鼻真目に見てるのかもしれないが、クラスの男子の多くがきつと不必要に視線を寄せてしまうことがあるであろう整った顔立ち。そう、この結衣は私の娘。私のことを大好きでいてくれる、たった一人の娘。……私はそれを知っている。けれど……何か違和感を感じている。あの日以来」

待合室のテレビからニュースの音が漏れ聞こえてくる

キャスター「続いてのニュースです。境山のバス事故から1週間。行方不明となっていた最

後の乗客が昨夜、遺体で発見されました……」

結衣 「お母さん？ほら、またハンドバッグ忘れてるよ。しっかりしてね、明日からお仕事にも復帰するんでしょ」

知美 「仕事……そうね。ごめんなさい」

知美M 「1週間前、私の乗っていた夜行バスは事故を起こして谷底に転落した。私を除く乗員乗客は全員死亡……覆いかぶさった乗客の一人がクッションとなったおかげで私だけが奇跡的に助かった。外傷も大したことなく、だからこそこうして仕事にも……」

○知美の職場

オフィスの喧騒。

部長 「いやあ、でも何事もなく戻ってきてくれて本当によかった。みんな喜んでるよ」

知美 「あ、ありがとうございます」

部長 「部署を挙げて君をサポートするよ。急ぎの仕事は振り分け済みだから中谷君には溜まつてる入力業務をお願いしていいかな」

知美 「わかりました」

知美M 「部長と思われるその男性に渡された書類束。そしてモニタに映る何やら見慣れないシステム画面。入力とはここにこれをということなのだろうか……」

部長 「あれ？ひよつとして腕痛くて入力厳しい？」

知美 「そうじゃなくてその……入力って何をどうするんですたっけ？」

部長 「え？……ははははは、驚いた。早打ちの達人の中谷君がそんな冗談言うなんて。ひよつとして事故に遭って人が変わっちゃった？あはははは」

知美 「えと……あは……あはははは」

知美M 「人が変わった……まさしくそんな気分だ。何につけても知識として知ってはいても感覚として違和感を覚える……なにか自分の記憶でないようなそんな気分が拭えない。

当然医者にもかけあった。けれどどこでも答えは同じ。異常なし。自宅で、職場で、朝起きて夜寝るまで、常にこの違和感はずきまとい続ける」

○知美の自宅

台所でカレーを煮込む知美

結衣 「あれ？今日のカレー牛肉なんだ？」

知美 「だってカレーって言ったら普通ビーフでしょ」

結衣 「でもお母さんいつも豚だったじゃん。まあいいか、少し贅沢な感じだし」

知美 「そう……だったっけ？」

結衣 「ねえ……あのさ……少し真面目な話していい？お母さん最近少し様子がおかしい

っていかさ……それって私のせい？」

知美 「何で結衣のせいなの？」

結衣 「その……再婚相手のことあたしに隠してるからなのかなって……」

知美 「再婚？私が？」

結衣 「叔母さんから訊いたんだ。最近上手く行っている人がいるって。でも、それをあたしに言っただけいいか悩んでるって。あのさお母さん。あたし全然反対なんてしないよ。

むしろ大賛成だからね」

知美 「そう……なんだ……ええと、うん、ありがとう」

知美M「私の知らない私の秘密だった。そんな事まったく思い出せない。ひよっとしてこれが違和感の正体？カレーをかき混ぜる手が止まり困惑を隠せない。そんな時だった」

ドアチャイムが鳴る

結衣 「私出てくる」

駆ける結衣。玄関の扉を開ける。

茅野 「こんばんは。夜分遅くにごめんね。こちらに中谷知美さんおられますか？」

知美 「私ですけれど……えと……」

結衣 「ねえ、ひよっとしてこの人？」

知美 「結衣、代わりにお鍋お願い」

結衣 「はい」

その場から去る結衣

茅野 「はじめまして。中谷知美さん……と言うのは正しいのかな。私こういう者です」

知美M「ブラックスーツを身にまとった壮年の男性は、テキパキと胸ポケットから手帳を出しこちらに見せる。それはドラマで良くみたことのある……」

茅野 「警察……みたいなものです。実はあなたの忘れ物を預かってまして、是非それを返却したいんです。つきましては、ご同行願えませんか？」

知美M「じつとこちらを見つめてくる男性。自然と目が合う。その次の瞬間だった体からずっと力が抜ける。抗いようのない眠気が遅い、私の意識は……途絶えた」

○ホテルの一室

知美M「どれくらい眠っていたのか、目が覚めた時私は見知らぬシティホテルの一室に横た

わっていた。余りの奇異な状況に私は咄嗟に部屋から出ようとする。しかし扉には鍵がかかっている……」

茅野 「待つて下さい。まだ何もご説明が終わってないですよ」

知美 「貴方誰です！？ここは一体！？私をどうするつもりですか！警察呼びますよ！！」

茅野 「いや、ですから私が警察みたいなものです。一つお伺いしたいんですが、貴方生きてて辛いんですか。その……妙な違和感を拭えないというか」

知美 「……どうしてそんなこと訊くんです」

茅野 「やっぱり。それね……貴方の忘れ物のせいなんですよ。ちょっとそのテレビみて下さい。今映像映しますから」

知美M「そういうと男はテレビに繋いだタブレットを操作します。大きなモニタに映し出されたのは霊安室のような場所。そしてそこに横たわる一人の男性の姿。中肉中背。少し長めの前髪。左の目元にある二つの黒子……知っている。私はこの男を知っている。これは……」

知美 「ワタシ……いや、俺だ」

茅野 「ご名答。これは1週間程前バス事故の現場に貴方が忘れていった貴方の体です」

知美 「じゃあ俺は……」

茅野 「一緒に旅行を予定していた女性の体を不法占拠なさってます。これは重罪に当たりますが、49日以内に解放すれば減刑が可能です。そうすれば今後の輪廻に影響も出ません。ということですので、その体を返して下さい」

知美 「思い出した……」

茅野 「さあ、お願いします」

知美 「俺がここから抜けたら彼女は死ぬのか？」

茅野 「ええ。けれどその辺の処理はお任せ頂ければ……」

知美 「分かった……返さないとな……決めたよ」

○知美の自宅

結衣 「どう似合ってる？お母さんのコーディネート信じてるからね。じゃあ私行って来る。初デート頑張ってくるから！！」

元氣よくドアを閉めて駆けて行く結衣。その後すぐにドアを開けて外に出る知美。

茅野 「ご無沙汰してます。今日で49日過ぎてしまいました……そうなさると？」

知美 「知美さんの娘さんなら俺が責任もって育てないと」

茅野 「本意はそれだけですか？まあいい。ところでこれからどちらに？」

知美 「……忘れ物を届けないと。あの子に……結衣に」

【終】

※ご利用上の注意※

- ・本脚本はどなたでも無料にてご利用いただけます。
- ・ご利用に当たつての改変などに制限は設けておりません。皆様のご都合に応じて自由に改変頂いてかまいません。
- ・本脚本をご利用頂く際は必ず作者 (gumba1227@hotmail.com) までメール報頂けますようお願い致します。
- ・但し、練習での使用などの場合はご連絡の必要はございません。
- ・連絡が必要かどうかの基準は以下の通りでございます。

※連絡不要の場合

- ・仲間内で集まつての練習でのご利用。
 - ・Skype などを通しての第三者の聴取・視聴が出来ない形でのご利用。
- ※連絡が必要となる場合
- ・ツイキャスやニコ生など第三者の聴取・視聴が可能な状況下でのご利用。

・連絡を要する形でのご利用の際は、必ず作品名・作者名をどちらかに記載いただけますようお願い致します。

その他ご不明な点ございましたらお気軽に下記までご連絡下さい。

gumba1227@hotmail.com (岩本)